

日本舞踊譜について

— 伎楽踏舞譜を中心に —

丸 茂 祐 佳

はじめに

『伎楽踏舞譜』は、嘉永7年(1854)10月に、名古屋西川流の祖初代西川鯉三郎によってまとめられた舞踊譜であり、第4回舞踊学会において伝書という立場からこの譜が持つ意義を考察してあるので、詳しくは『舞踊学』創刊号を参照して頂きたい。今回は舞踊譜としてこの譜の考察を試みたが、これは拙著『おどりの譜—伎楽踏舞譜—』(昭和59年発行)の内容と重複する点が多いことを始めにお断わりしておきたい。

さて本稿では、現在私たちが認識している術語の把握と異なるもの、譜の名称・記号・原文から口伝らしき内容の跡が伺えるもののうち、六法と丹前、及び娘の動作に焦点を絞り、特に記号との関連において、各譜を連鎖的に紹介したいと思う。

一 『伎楽踏舞譜』の六法・丹前

(一) 六法について

『伎楽踏舞譜』に「六法、の説明は次のようにある。

ロツボウ
六法ト
コガフリ、男者ニ用ユレドモ、時ニヨリ
女形ニモ用ルコトアリ。

「両の手足を左右前後に振りながら誇張した模式的な動作で歩く芸」(『日本舞踊辞典』より)が六法(六方)であり、「吉野山」の孤忠信が幕切れに花道を引っ込む時に「孤六法、を、歌舞伎十八番「勸進帳」の弁慶が同じく幕切れに花道を引っ込む時に「飛び六法、を使うのが有名である。他にも日本舞踊の一曲の中で勇ましい合戦の様子を語る時、武張った役柄(奴なども)が一度引っ込む時などにも六法を使うことがある。だが『伎楽踏舞譜』では、これらの一連の六法の技法だけを意味しているわけではなく、もっと大雑把に捉えていたことがわかる。それは記号トが、縦の線＝顔と胸をつなぐ線、横の線＝両肘を張っている線、という形に受け取れるため、武張るという基本的なことをも示す場合があると解釈したのである。例えば「扣、という譜の動作の説明の中で使われている六法を、肘を張った両腕を前後に武張

らせた形として解釈すると、名古屋西川流から分派した工藤流における現行の「安宅の松」の振とが一致したのであった。

ヒカヘ
扣ト
安宅後ノしのぶ
此振ハ、手足、六法フリ出シテ、中ニテ
ヒク
引ナリ。

(二) 丹前について

『伎楽踏舞譜』では、丹前のことを「丹扇、と書いてある。

タンゼン
丹扇ト
戻駕 チンチンチンチンチン…チン
此振ハ、豊後又ハ歌ニテモ、^{オガ}下リ^ハ端ト云
合方ニ用ユルフリナリ。腰巻羽織^{コシマキハオリ}デナク
テハ移ラズ。

名古屋在住の名古屋西川流の古参の師匠の「戻駕」の「腰巻羽織」の振を調べたら、足を割って体の重心を左右に滑りっぽく移動させる動作をしていた。記号トが、上半分＝両腕を武張らせた上半身、下半分＝右足に重心をかけた下半身、をあらわしていると考えることができ、いわゆる丹前六法の技法も「手のひらを開いて、軽く前で結び、握って左右にやわらかく開き」(『日本舞踊辞典』より)前後に重心移動をする滑りっぽい動きをするので、丹扇と言え、足を割って体の重心を左右、または前後に滑りっぽく移動させるゆったりとした動作として大まかにつかんでいる時もあると解釈できるのは、六法の場合と同じである。

また『伎楽踏舞譜』では丹前六法を「須伊遷、と「九重、とに分類し、使い分けていたらしい痕跡を残している。

スイセン
須伊遷
本字
未詳
「安宅 すへは三国のみとなる
此振ハ、手ヲ握リ、前エナラベ、上・下
ニテ同ジコトニ、表カラ引き、前エクリ
出シ、裏ニテモソノ如ク、丹扇六法ニ多
シ。俗ニ丹扇ト云。

「末は三国の湊なる」の振は名古屋西川流、宗家西川流の古参の師匠、工藤流ともほとんど同じ振をするが、これらより須伊遷の動作は現在一般に言われている丹前六法に近いものと推定できる。また譜の名称は「本字未詳」とあるが、これは「水仙丹前」の水仙であり、この作品の中で使われていたことからスイセンと術語化して呼んでいたであろうと推定できる。「水仙丹前」の曲は残っているが、今日では振は伝承されていないのが残念である。

九重九

此振ハ、アト同ジコトニテ、マワスタケ
ノ違ヒナリ。是ハ胸ノ処ニテ、クルクル
手ヲマワシテアニナルナリ。

ムスメ
娘ハ 妹背山 水ぎはのたつ ^{おみ} ^{わん}
此フリハ、向ヲ見テ、袖ヲ叩キ、走ルコ
ト也。タク山入用ノモノナリ。

「胸ノ処ニテ、クルクル手ヲマワシテ」とはおそらくカイグリのことであろうから、現在一般に呼んでいる丹前六法の技法を九重と呼んでいたと考えてよかろう。

このように、現在私たちが丹前六法と呼んでいる動作を、少なくとも『妓楽踏舞譜』では須伊遷と九重とに分類しているのである。

今日でも六法と丹前は、その語源・語意・技法や、それらの相違を問われている。今から約130年前の舞踊譜をこれらの解明への手掛りとすることはできないが、当時ではどのような把握をしていたのか、例えば今日では九重と呼ばれていたものを一般に丹前と呼んでいるが、当時では須伊遷と呼ばれていたものが丹前として一般的であったのではなかろうか、などということを探ることができるとは思っていない。

二 『妓楽踏舞譜』の娘の動作

(一) 恋という譜について

“恋”の原文は次の通りである。

恋の 葉の葉 しめす心のあどなきは
コノフリハ、指ニテのノ字カクフリ也。
娘形ニ入用ナリ。傾城・芸子、スベテ年
タケタル振ニハ用ヒズ。

現在でも、例えば見合の席で若い娘がモジモジと恥じらう様子を、具体的には畳に「の」の字を書く仕科として連想する。恋という譜の動作はこの「の」の字を書くことであり、原文には「指ニテ」とあるが現在は袂を持ってする場合が多い。昔も恥じらう娘の表現方法が同じであったことを証明しているが、椅子の生活へと移りつつある将来はいずれこのような仕科は生活の中で自然と消滅し、日本舞踊の「の」の字を書く振で娘が恋心を抱いてモジモジしている状態を示すという効力が薄らいでいってしまうことだろう。

(二) 娘という譜について

“娘”の原文は次の通りである。

相手を見つけて喜んで小走りする動作は、娘らしさの表現に通じる。この小走りする動作を私は「娘は胸で山形を描くようにしてから走れ」と稽古で教わった。娘という譜の記号は山形ハとなっているが、これは胸で描く山形を示しているのだから、この譜の動作は正確には、胸で山形を描くようにして向うを見て、喜んで手または袖を叩いて小走りするということになる。胸の使い方方は娘らしさを表現するのに大切なところだが、振の意味をだんだんと問われなくなってしまっている現況から察すると、将来の稽古では小走りすることだけを大事に扱い、「胸で山形を描いてから」と口伝することは望めなくなってしまうのではなかろうかという不安がある。原文に「タク山入用ノモノナリ」とある通り、藤間流の作品に限っても「浅妻船」「鶯娘」「汐汲」「娘道成寺」などにこの動作の類型が使われており、娘の作品には普遍的に用いられているものであることは知れよう。

以上『妓楽踏舞譜』の中の娘の動作のうち“恋”と“娘”を取り上げたが、これら二つはまさに娘をあらわすのに大事な点が記号となっているのであった。だが残念なことに時代の移り変わりによって記号の持つ意味も薄れ、動作の中の重要な点が伝承されずに終わってしまう可能性が強いと考えられるのである。

おわりに

本稿は口頭発表した内容を一部に絞って掲載したため、表題とテーマが異なり恐縮ではあるが、約10年間『妓楽踏舞譜』に接してきて一番重要と考えられる点は、日本舞踊には技法の術語、もしくは術語化されていなくとも一連の動作が想像以上多数存在していたのではなかろうかということであった。従って、他の文献や現状でこれらを探究し解明していくことが現段階で日本舞踊譜の問題を考える上で大切なキーポイントになろう、と思っている次第である。